

第3回 昭島市地域福祉活動計画策定委員会 会議要録

一 会議の日時及び場所

日時：平成26年5月22日（木） 午後6時30分～午後8時50分

場所：昭島市保健福祉センター1階 視聴覚室

二 出席した委員（15人）

五十嵐和夫委員、大田眞也委員、大山弘一郎委員、奥村展子委員、久保美智子委員、指田準委員、高橋知子委員、常木浩史委員、橋本一政委員、福島忍委員、牧野奈緒美委員、松田京子委員、皆川貞次郎委員、宮田次朗委員、佐藤一夫委員

三 議事

1 報告事項

- 1) 地域懇談会の実施
- 2) 意識調査の結果

2 協議事項

- 1) 昭島市地域福祉活動計画骨子
- 2) 関係団体の聞き取り

3 その他

報告事項 1) 地域懇談会の実施

【事務局】

地域懇談会を、平成26年2月3日から7日までの5日間、市内5会場で開催した。期間中は雪が降る日もあり、大変に寒い時期であったが、自治会や民生・児童委員の皆様方をはじめ、多くの方々にご出席いただいた。策定委員の皆様にも、ご出席いただき、改めて御礼申し上げます。

出席者数は、5日間で延べ88人であった。一番多かった会場は、2月3日の保健福祉センター（あいぽっく）で、26人、最も少なかったのは、2月6日の環境コミュニケーションセンターで、7人であった。この日は、福島委員長にもご出席いただいた。

懇談会は、最初に昭島市社会福祉協議会について、その成り立ちや事業の内容等を説明した後、現在、地域福祉活動計画を策定中であり懇談会で出てきた課題を計画の中に盛り込んでいきたい旨説明した。その後、「地域課題の発見」に入り、4～5名のグループに分かれて討論を行った。「地域の良いところ（自慢できるところ）」、「地域の問題点（課題）」、「こんな地域にしたい（目指す地域像）」の三つの項目を色分けした付箋紙に書き出し、項目ごとに模造紙に整理した後、代表者にグループ発表していただいた。グループ討論には進行役として、社会福祉協議会職員が必ず加わるようにし、地域の方々に社協の職員の顔を知ってもらえるようにした。

当日は、「自治会への加入率低下の問題」、「新旧の住民間にある地域に対する感覚の違い」、「災害対策」などが話し合われた。結果としては時間の制約もあり、課題の抽出までには至らなかったが、地域のつながりが薄くなっていると言われていた中、まだまだ昭島には、隣近所の付き合いが残っているなど感じた。ただ、世代を越えた交流や新旧住民の交流については、機会や場所が少なく、この計画でも取り上げていくべき課題ではないかと感じた。

【委員長】

美堀地区の懇談会に出席した。環境コミュニケーションセンターで行われたが、初めてここに来たという人もあり、こうして集う「場」というものが大切だなと感じた。今回のアンケート調査でもサロンを開催したり、ちょっと話し合う時に集まる場がないという意見があり、住民活動をする時に場が重要だと改めて認識した。

【委員】

昭島にはまだまだ、地域の交流が残っていると説明があったが、ここに参加している人は、地域で活動している方たちであると思うので、懇談会の印象は、意識が大変に高いという結果になったのではないかと思う。

【委員長】

私も同感である。

【委員長】

誤字を指摘しておく。5 ページ、「地域の課題？」の 1 行目、「地位」→「地域」。
9 ページ、「こんな地域にしたい！」の下から 15 行目、「地位」→「地域」。

【委員】

地域のこと、子育てのことなど様々な話題が出ているが、参加している方々の年齢はいくつぐらいか。

【事務局】

年齢を記載してもらったわけではないが、50 代以上の方々が大半であったと思う。

【委員長】

自治会の役員のなり手がいないとか、高齢化のことなど、自治会のことが多く話題になっていた。自治会の新しいあり方として、例えば、国分寺だと思うが、自治会を解散してしまって新たにそれに替わる市民団体や NPO が入っている地域もある。懇談会を聞いていて、今はいいかもしれないが、このままでは課題があるかなと感じた。

【委員】

自治会でもこの 6 月から市と自治会の加入率をどうするのか、協議を始める。自治会でもこの問題は危機感を持っている。解散して新たな組織との議論もあるが、今、コミュニティ組織をつくって成功している例もある。

【委員長】

私は自治会を解散して新たな組織がいいと思っているわけではない。誤解をあたえて申し訳ない。

報告事項 2) 意識調査の結果

【事務局】

調査対象者については、前回の委員会での議論を参考に、委員長と協議し、資料に記載してある団体及び部数で実施した。

調査期間は、平成 26 年 2 月 20 日から 3 月 31 日まで、回答状況は、1,100 部配布し 604 部回収、回答率は 55%であった。回答者は、男性 4 割、女性 6 割で年齢的には、高齢への偏りはあるものの 20 代からも回答をいただき、比較的幅広い層から意見が伺えたと考えている。3 ページの「地域との関わり」では、思いのほか地域との関係

を保っている様子がうかがえる。困っている方への対応では、何かしら手助けしたいと思っている方が9割以上あり、反面、実際にどうしたら良いのか分からず、行動につながらないという方もかなり多くみられる。5ページの「これから必要だと思う地域福祉の取り組みについて」は、「住民同士の支え合い、助け合い活動の活性化」が第1位、「住民が福祉のまちづくりの一員であることを自覚する」が第2位となっている。6ページの「高齢者、障害者にとって住みよいまちをつくるためには」の問いには、制度面に対する要望が多岐にわたり寄せられた。7ページの「子どもを健やかに育てるために重要なことは」の問いには、「子育ての親が心のゆとりをもって子育てができる支援を充実させる」との回答が最も多く、次に「地域ぐるみで子どもの成長と子育てを支える環境を整備する」と続き、子育て中であるからこそ「心のゆとりが必要である」という趣旨の回答が多く寄せられた。8ページの「ボランティア活動」は、「誰でも気軽に参加できるような環境整備」と「分かりやすい情報提供の必要性」が回答の上位を占めている。9ページの「社会福祉協議会に期待すること」の問いには、設問で回答数に制限を設けなかったこともあり、15の項目におよそ2,500件のご回答をいただいた。一番多く寄せられたご要望は、「家事援助などの在宅福祉サービスの充実」であった。10ページから自由意見を掲載した。

【委員長】

10ページの高齢社会に関してのところで「一人暮らしの人達を年に1～2回でも訪問して欲しい。現在は年末に来てくれるだけです。」とあるが、これは民生委員の訪問の事を言っているのか。

【事務局】

そうだと思う。

【委員】

この内容は公表するのか。

【事務局】

ホームページで公表することを考えている。

【委員】

7ページに全体と子育て世代を比較した分析をしているが、若い世代がどういう意識を持っていて、どのような施策が必要で、どうすれば参加できるのか、せつかくの調査なのでクロス集計して浮き彫りにするといいいのではないかと思う。

【事務局】

抽出する項目を整理して次回にお示しする。

【委員長】

この地域懇談会や意識調査で見えてきた昭島市の地域課題について少し議論してもらいたい。今、見えてきたのは「地域コミュニティの希薄化」や「新旧住民の意識の乖離」などだが、順に日頃感じていることをお話をしたい。

【委員】

昭島では、いわゆる旧村と新しい人との意識の差がいまだにある。場所によっては、50年たっても残っており、これを政策の中で対応していくのはなかなか難しい。どう歩み寄り、同化しながら、新しい昭島を構築していくのかということは常々念頭において活動しているが、みんなが努力して時代に合った昭島像を目指す必要性を感じている。

【委員】

「地域のつながりがいい」という意見と「希薄だ」という意見、両方ある。原因は、新旧の交流がうまくいっていないのか、若い年代と高齢の方とがうまくいっていないのか分からないが、若い人達がなかなか地域に出てこない要因は、何かやらされるとか意見を言っても聞いてもらえない、といった意識がある。どれだけ若い人達に参加してもらい、若い人の意見を取り入れていくかということを考えていかなければならない。伝統にはいい部分と悪く作用してしまう部分もあって、ここにあるような20代、30代の意見を取り入れていくことも必要である。

【委員】

子育て世代はみんな頑張っている。その中で、せっかく出してもらった意見なので、どのように計画に反映していくか重要だと思う。出された意見を大切にしてもらいたい。

【委員】

異世代交流は大切だと思う。例えば、市内には子育て広場が何か所もあり、子育て中のお母さんが集っているが、その中に高齢者のボランティアが入っていくというようなことを考えたらどうか。やり方を工夫して考えていけば、とっかかりが出来るのではないかと思う。また、普段は考えていることを発信する場がない。調査した時だけでなく、日常生活で気付いたこと、日頃の思いを反映させるしくみが必要だと思う。

【委員】

若年層が自治会に入らないということが課題である。自治会に入らず子供会だけ入りたいという人もいる。色々な考え方があり、強制出来る事でもない。

【委員】

社協に対して辛口な意見が多い。私達は、社協の事業を知っているが、市民の皆さんには知られていない。どこが課題かと考えると、発信力が足りない。だから市民にも伝わらないと思う。それから、この計画が、作っただけで終わらないように、絵に描いた餅とならないようにしないと回答してもらった人達に納得してもらえない。障害者については、なかなか分かってもらえないので、理解を促進するためのボランティア講座や交流会を社協でもっともっと実施してもらいたい。他地域では地域福祉コーディネーターがいるところもあるが、昭島社協はまだまだなので、今後充実していく必要があると感じている。

【委員】

青少年の健全育成という面から、市内の小学校 15 校に地区協議会（ウイズユース）という組織がある。構成メンバーは、学校長、自治会、民生委員、地域のスポーツ団体、ボランティア、PTA など多種多彩な方々がいる。私見だが、地域内の世代間の交流ということを見ると、この組織などの活用が考えられるのではないか。こういう様々な年代で様々な団体に所属している人達が集まっている組織は他にはあまりない。災害の時の避難所運営のベースとなる組織としても期待できるのではないか。

【委員】

子育て世代からの回答が意外に多かった。福祉というともっぱら高齢者、障害者となりがちで子ども関連が置いていかれる傾向にあるが、今回の結果は良かったなと思っている。その中で、中高生についてはすっぱり抜けてしまった。地域のボランティアを支えているのは中高年のシルバー世代、次に子育てをしているお母さん、次に中高生となる。そここのところの意見も聞いてみたいなと感じた。回答で一番違和感があったのは、80%の人が近所付き合いをしていると回答しているところ。私の感覚とはずいぶん違うと感じる。この部分は、世代別、地域別の集計を見てみたいと思った。

【委員】

今回のアンケートでは災害の項目が欠けていたと感じる。福祉の面から災害が起こった時にどうするかという設問があっても良かったのではないか。計画の策定にあたって、意図的に災害を取り上げていくことが必要ではないかと思う。

【委員】

地域懇談会などでは結構話合われていたように思うが、私も災害が足りないと感じる。災害を考える時には、災害が発生した後のことだけではなく、災害の前の備えの部分も大切である。顔の見える関係を築いておくこと、専門性のある団体とどのように連携できるか、ボランティアはどれだけ動けるのかなど防災、減災の面から考えておくことが必要である。それと、先程地区委員会の活用という話があったが、関西では小学校レベルでの校区社協、あるいは校区福祉委員会という、住民の方々の地域福祉活動組織がある。東京ではまだまだ進んでいない。既存の日常生活圏域の組織の中で福祉の課題を取り上げてもらい、何が出来るのかを社協と一緒に考えていくことが重要である。調査結果の高齢者の施策でも、住民の支え合いが重要だという声が多い。これは、住民の行政への期待の一方で、自身も自治会などを中心にやらなければいけないという思いを持っていることの表れだと思う。その人達をどのように引き出していくのかということが、今後の課題だと思う。

【委員】

子育て世代からの意見をもっと聞く必要性を感じる。市内のサロンを訪問する機会があったが、子育てサロンに集うお母さんの顔が、普段と違っていきいきとしていたことが印象的だった。こういうところにも力を注がなければと思う。もう一つ、忘れていけないのは、ひきこもりやDVなど、ここに表れてこない意見が多数あるということ、これをどうひろいあげていくかということが課題である。それから、都内では災害時の要援護者の安否確認なども中高生のパワーを活用した訓練を実施している。こうした中高生や働き盛りの人達の力を活用した新しい活動組織が出来たらいいなと思っている。従来の組織の単なる積み上げとか充実よりは10年先を見た組織づくりが必要ではないかと思う。

【委員】

回答結果は、縦割り行政の象徴だと思う。市内の自治会は100あり、それが20のブロックに別れている。自治会としては、中学校を一つの単位と考えており、今年は地域別のミーティングを行う予定でいる。それと、災害時の避難所運営組織が決まっていなかったのが今年の1月から運営組織をつくっていくように動き出した。このように、自治会では主に防災の面から今までの活動を見直してきたが、福祉についても主要な課題として取り組みたい。今まで、自治会と社協のつながりが足りなかったと感じているので、自治会がベースとなるようにやっていきたい。

【委員】

近所付き合いのところで、600人中590人の人が、顔が合えば挨拶するというのは自分の生活から見るとちょっと違うんじゃないかという感じを受けた。それから、社協に対する個別の意見がなかなか厳しい。色々なアンケートを見てもここまで厳しい意見はあまりない。これは社協が正しく理解されていないことの表れで、必要な情報が必要な人に届いていない、という気がする。これだけの情報化社会でありながら、必要な情報をきちんと発信して必要な人に届けていくということがいかに難しいことであるか改めて感じるとともに、だからこそ重要であると感じた。

【委員】

実働部隊である医療機関は、災害時にコミュニティや皆さんの団体などと大きな関わり合いがあるので、何か起きた時にどう関わっていくのかと言うことは、常々考えている。地域医療として色々、計画を練っているが、訓練などでは、我々が率先してやっていくというのは難しく、テーマを決めてそれにどう応えていくかということが多い。このアンケートの結果も医師会に持ち帰り参考にしていきたい。

【委員長】

皆さんから意見をいただいて、いくつかポイントが出てきた。災害対応としては、日頃からの近所付き合い、顔見知りの関係が非常に大きく影響してくるということ、また、今、NHKでコミュニティ・ソーシャル・ワーカーを扱ったドラマを放送しているが、昭島にはCSWがまだないという話もあった。このアンケート調査を見て私なりに感じた事を少し話してみたい。

はじめに、サロンなどをやりたいが、場所がないという意見がいくつかあった。何かやろうとした時の拠点となる場があるということは先程もいったように大変重要で、ハード面の整備が必要かなと感じた。

異世代交流についても意見をいただいたが、これも重要なキーワードだと思う。昔の三世帯世帯から様変わりした現代では、意図的な高齢者と子どものつながりの場が必要であると言われている。新宿区では、高齢化が進みゲートボール協会の維持ができなくなってきており、大会を開催するにしてもスタッフがいない状況になっている。そこで、私の大学の学生などに声がかかったが、これなども今ならではの課題に対応した世代間交流の一例であると思う。異世代交流は、今の生活課題、地域課題に照らし合わせてどのような仕組みづくりが出来るかがポイントである。自由回答欄にもスーパーが近くにないなどの買物難民、買物弱者の話があったが、今、生活で困っていること、ニーズのあること、必要とされていることに対して支え合いの仕組みをつくり、その中で色々な世代の人達が手伝うことによって世代間交流が生まれてくるのではないかと思っている。人とのつながりをつくる時のきっかけとしてはみんなの関心が高い防災などは有効である。

若い人に参加してもらいたいという話があったが、これには地域に対する愛着というものが重要になってくる。お祭りなどの思い出をつくる中で地域に対する愛着ができ、自分が大きくなった時に地域に貢献していこうという意識が芽生えるのではないか。私の担当する学生も結構自分の住んでいるところに愛着を持っていて、将来は地元で何かやりたいと考えている子も多く、いかに子どものころから地域への愛着を育んでいくかということがポイントではないかと感じている。

地域福祉コーディネーターの話があったが、CSWの配置も一つの方法だが、今回、高齢者や障害者の見守り体制の必要性も見えてきた。新宿の例だが、見守り協力員という人が、65歳以上の希望する高齢者宅に「ぬくもりだより」というのを持って訪問する仕組みがある。75歳以上の一人暮らしの方には、おせっかいだが、希望がなくても配っている。見守り協力員は区民から募集したもので、住民参加の見守り活動となっている。こんな取り組みも昭島で広げていけたらどうかなと思う。

社会福祉協議会を知らないという人が多くいたが、一つの試みとしてキャラクターなどマスコットを考えてみたらどうか。福島県のいわき市社協に行った時にキャラクターがあって、子どもから大人まで世代を越えて人気があった。子どもの頃から社協を憶えてもらうのは効果的である。

【委員長】

他に意見等ないか。

【委員】

提案だが、夏ボラを発展させて、ボーイスカウトやガールスカウトなどのような、社協の小中学生のボランティア隊をつくって活動したらどうか。それから、地域包括ケアシステムとの関連。国は自治会や老人クラブなど既存の組織を想定してこのシステムを考えている。

【委員】

仕組みづくりが大切だと思う。例えば、民生・児童委員の仕事をサポートする地域の人材を養成して、身近な情報収集などをお願いする仕組みはできないものか。養成講座を開催すると沢山人が集まるが、その後の具体的な行動につながっていないのもったいない。仕組みづくりと人材育成は活動計画に盛り込んでもらいたい。

【委員】

防災と同じように福祉の原点は隣近所で困っている人の面倒を見てあげることで、この思いを地域で醸成することが重要だ。人材を育てるのではなく、自分達が人材になってもらうことが必要だと思っている。

【委員長】

昭島市には民生委員のほかに福祉委員とかはいないのか。

【事務局】

議論にあったような民生委員の仕事をサポートするような役割の人はいない。

【委員長】

今は民生委員だけでは負担が多すぎると言われている。多くの地域で福祉委員のような人を置いている。先程の新宿の例でも、見守り協力員、地域包括支援センター職員、民生委員、区役所職員が定期的に会議を開き情報交換している。こういう中間的な人材を置くことも考えていく必要性を感じる。

【委員】

色々な地域で民生委員を支える協力員制度があることは承知している。個人情報など制約もあるが、昭島にあった仕組みを考えていくことが必要だと思う。

【委員】

高齢者の見守りは東京都全体でも色々な取り組みが進んでいる。委員長が紹介した新宿区の事例は区が社協に委託して、住民のボランティアとして見守りをしている。また、雨が降っているのに洗濯物が出しっぱなしになっているとか、住民がちょっとした地域の異変に気付いた時、情報を包括支援センターや社協、民生委員に連絡して専門機関が動くという取り組みを行っているところもある。たくさんの地域の方々に関心を持ってもらうことが重要である。昭島でもどういものをつくっていけばいいかこの会議で議論していけばいいのではないかな。

サロンについてはハードの不足が都内どこの地域でもある。福祉施設や店舗、空家などそれぞれ工夫しているが、サロン活動は色々な機能を持っているのでこれも計画の中で検討していくのがいい。

【委員長】

拠点の確保は様々で、信用組合の2階とかショッピングプラザの中など使っているところもある。今後も皆さんと一緒に考えていきたい。

【事務局】

計画の全体的な概要だが、昭島市の行政計画には、次世代育成支援や介護保険など、福祉に関わる部門別の計画はあるが「地域福祉計画」と名の付いたものはない。また、昭島社協の地域福祉活動計画は、平成7年に作成したもので、今日まで手が付けられてないので、今回の計画は、地域福祉を実現するための、新たな基本計画に位置付け、作成したい。他の計画との関連だが、市の第5次総合基本計画にあるまちづくりの視点を基本とし、地域福祉に関わる4つの計画との整合を図ることとする。計画の期間は、社会情勢の変化や福祉制度のめまぐるしい変遷などを勘案して、中期的な5カ年計画とし、必要に応じて見直しを行うこととする。計画の基本的な理念は、あまり大きく変わるものではないと考え、概ね前計画の理念を引き継ぐこととする。目標とする将来像は、基本理念をイメージするものにしたいと考え、仮称として『心かよわせともに生きるまち あきしま』とした。ちなみに、第5次の昭島市総合基本計画の将来都市像は「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま～人も元気 まちも元気 緑も元気～」である。計画の柱は、高齢者、障害者、子育ての三本柱に「ともにつくる」という意味を込めて協働のまちづくりを加えた。計画の実施は、(1)から(6)までの6項目とし、それぞれ具体的に実施する事業を記述するとともに、あわせてその事業における社会福祉協議会や市、地域団体などの役割を明確にして実効ある計画としたい。計画の周知と実践だが、計画推進委員会のような組織を立ち上げ、計画の進捗状況を検証する中で、確実に計画が推進出来るようにしたい。骨子の内容を基に次ページには目次案を示した。

【委員長】

項目ごとに議論したい。はじめに基本計画に位置付けたいとの事だが、事務局の考えをもう少し聞かせてもらいたい。

【事務局】

他の社協の活動計画をみると、現状把握の後、課題を分析し、実施する事業を記述するなどのようなオーソドックスなつくりのものとマニュアル的な使い方を想定したつくりのものがある。昭島市社協の場合は、事実上いままで活動計画がない状況であったので、新たに基本となる計画としたい。

【委員】

計画の使い方によって決まってくるが、骨子や目次案をみれば基本計画でいいと思う。

【委員】

これまでに懇談会やアンケート調査を行い課題や提案が出てきたのだから、それに対応するための方針、実施する事業などをまとめた基本計画でいいと思う。

【委員】

異論はないが、最初から疑問に思っていたことがある。行政はこの計画にどうかたちで関わろうとしているのかが見えない。昭島市の地域福祉の計画を社協がつくろうとしているわけで、社協は財政的にも人的にも潤沢ではない。

【委員長】

少し整理すると行政が作るのが「地域福祉計画」、今私達が作っているのが「地域福祉活動計画」で、地域福祉計画は、法律上策定義務はない。全体でも6割が策定済みで4割は未策定である。昭島市では策定義務のある高齢者、障害者、次世代育成については個別の計画があるから、あえてその上の計画である地域福祉計画をつくっていないのだと思う。

【委員】

委員長の言うとおりの市には個別の計画の上位計画として総合基本計画があり、当然その中では福祉分野についても書かれている。従ってその中間に、計画を作ることは屋上屋を架すようなこととなるので作ってはいない。しかし、上位計画ではなく地域で福祉を実現していく計画として必要ではないかということは、常に考えていかなければならないと思っている。それと社協がどのような方向性を持ってやっていくのかを明らかにしてもらう必要があり、行政はそれに基づいて支援をしたり意見を貰ったりしながら福祉の推進を図っていくことになるのではないと思う。この骨子の中にもあるように、市の計画を踏まえて策定するという事だから、その中で市の方向性も明らかになると思う。

【委員】

といことは、この計画をつくることは行政をしばることにならないか。社協が作った計画で行政が動くということがあるのか。

【委員】

行政をしばるものとは考えていない。社協がこれからどのように行動していくかということが明らかになるので、市としてはそうしたことも考慮しながら福祉施策を考えていくこととなる。計画策定には市から福祉と子育ての分野から2名の委員が参加

しているので、意見を出し合う中で両者の方向性が違うということにはならないと考えている。ただ、個別なことで具体的になる場合は、調整が必要になってくることも考えられる。

【委員】

そうすると、その場合には人、もの、金ということを考えると、相応の負担を覚悟しているわけか。私は、立派なものをつくっても機能しなければしょうがないと思っている。だから、出来る範囲の中でやると言うのも一つの選択肢かなと思っている。話に出ていた見守りの件も、私達の団体では、民生委員が多くの世帯を抱えている状況から少しでも手伝えないかということでルールを決めてやっている。ものの配付や異常を察知することなど例としてあげられたようなことも既に実践している。

【委員】

地域包括も行政の一員として考えればお叱りを受ける立場かも知れないが、要は昭島の福祉は遅れているという意識があるのではないかと思う。だからこの場で話されることは非常に理想が高く、あれも、これもということになり、行政として覚悟が必要だということになるのではないか。我々もその部分は解決しようとしている最中で、今後も市の指導のもと、努力していく。

【委員長】

事務局は今の問題をどう考えているのか。

【事務局】

行政の作っている福祉に関する個別計画とは、様々な法律に定められた最低限実施しなければならないものを保証するための計画で、施策を計画したものだと思う。一方、それを実現するために必要な地域社会を見ると、つながりが薄れ希薄化した現状がある。地域福祉活動計画とは、そのつながりを取り戻すためにここに集まっていた方々で話し合い作っていく計画であると考えてるので行政の計画とダブルものでなく、活動計画が行政への要求に代わっていくものとは考えていない。

【委員】

私は、この計画は、地域には色々な力がある、眠っているものもたくさんある、それをどう活用していくか、我々が社協を中心としてそこにどう対応していくのか、どのような組織づくりをするか、この議論の中で方向性を出していくものだと思っている。だから、人的な資源というものは、行政に頼るのではなく、むしろ地域の中からどう掘り起こしていくのか、そのための組織づくりや育成をどうするのかであり、こ

の活動計画の中でしっかりと方向性を出していくことが必要だと思う。そうしないと、細部の方策だけを上げたのでは、何でこの活動をするのかという常に原点に戻るような論議になってしまう。基本を押さえて具体的な計画をつくったほうがいいと考える。

【委員長】

それでは、協議事項に戻って、項目ごとに決めていきたい。まず、基本計画でよいか、期間については5年でよいか。私が調べた範囲では、5年が多い。

「異論なし」

【委員長】

サブタイトルをつけるか。他では、例えば静岡市社協では「つなぐ、つながる、つなぎ合う」、横浜では、「誰もが安心して自分らしく健やかに暮らせる横浜をみんなで作ろう」、豊島では、「豊島ナイスプラン」など。私個人としては、具体的な方がいいと思っている。例えば、練馬では「一人の不幸も見逃さないつながりのある地域をつくる」、新宿では「みんなが主役、身近な地域のまちづくりプラン」である。意見等あるか。

【委員】

今いきなり決めるより、内容を議論する中で、計画の内容にあったものを最後に決める方がいいのではないか。

「賛成」の声あり

【委員長】

それではもう少し検討してからとする。次に、「基本的な考え方」について意見等あるか。

【委員】

基本理念、「ともに生きる」のところ、「理解し合い、尊重し合い、支え合い」と「合い」を重ねるのがいいのでは。「未来に拓く」のところ「いつまでも住み続けたいと思えるまち」の方がいいのでは。目標とする将来像のところ、「仮称」と使うか。「案」でいいのでは。計画の柱のところ、全て「まちづくり」と使っているが、ハードを連想するので、表現を変えたらどうか。

【委員】

今日のアンケート調査等の報告で課題が見えてきたところであり、この部分は早急に今日決めなくてはいけないのか。是非持ち帰って検討したい。

【事務局】

次回に素案を提示する予定だったのである程度骨子を決めたかったが、重要な部分なので十分検討してもらいたい。今日でなくてもよい。

【委員】

この骨子（案）の中には子どもの幸せという視点が欠けているがそれでいいのか。

【事務局】

子どもたちの立場に立ったまちづくりという観点を入れるのであれば、あくまで（案）なので、もう一項目加えることも可能である。

【委員】

計画の実施、関係機関との連携のところ、公助、共助、自助とあるが、地域包括ケアシステムでは、自助、互助、共助、公助となるのだが、この場合はどのように使っているのか。

【事務局】

特に使い分けしているわけではない。新しい概念として互助があるなら、加えていきたい。

【委員】

地域包括ケアシステムでは、一応、互助が住民の助け合い運動、共助が共に助け合う部分として社会保障関係、公助が限定的なサービスを表現している。

【委員長】

多くの文献や報告書では自助、共助、公助と表している例が多いが、場合によっては互助が使われる場合もある。

【委員】

今は、3つと4つの表現が入り混じっている状況である。互助、共助と使い分けるとその部分をきちんと説明していかないといけない。使い分けなのか、この中で議論していけばよいのではないかと。

【事務局】

検討する。

【委員】

「計画推進の柱」のところだが、表記が「高齢、障害、子育て」で最後がそれをまとめた形になっている。今日の意見やアンケートの結果などをみると、子育て、高齢者、障害者というような縦割りで考えるのではなく、そうした社協が対象とする全ての人にどう情報を伝えるか、どうニーズを把握するか、どう支え合うかといった視点でまとめる事も一考ではないか。

【委員】

「計画推進の柱」のところだが、「一つになって」の表現は「つながって」などの方が分かりやすいのではないかと思う。

【委員】

「目標とする将来像」のところだが、「ともに生きる」の表現は重いと思う。

【委員長】

今までの意見を参考に改めて骨子案をつくる。

協議事項 2) 関係団体の聞き取り」について

【事務局】

前回の委員会で、市民へのアンケートとは別に、福祉の現場で対応している専門職の話聞くことも必要ではないか、との意見があったので、関係団体からの聞き取り調査を行いたい。

聞き取りを予定している項目は、「関係する福祉分野で公的制度では解決出来ない課題」、「小地域福祉活動における各団体の役割」、「他の関連団体との連携」、「災害対策」、「社会福祉協議会に望むもの」の5項目、対象とする団体は、「自治会連合会」、「民生委員・児童委員」、「あきしま地域福祉ネットワーク」、「地域包括支援センター」、「昭島市障害者（児）福祉ネットワーク」、「青年会議所」の6団体を予定している。期間は、6月中とし、各団体の代表と事務局との懇談会を実施したい。

【委員長】

意見等あるか。

【委員】

この対象は策定委員に出ている団体だけなのか。

【事務局】

結果としてこうなった。

【委員】

これからの地域福祉を考えていく場合、若い人の考えを取り込んでいくことが必要だと思う。この中には入っていない。

【事務局】

検討する。

【委員長】

その他であるか。

【事務局】

本日、第2回策定委員会資料No.1を配布した。前委員の谷部委員が作成してくれたもので、前回の「地域福祉を取り巻く現状」の資料を補完するものとして活用してもらいたい。サロン活動のパンフレットが出来たので配付した。

【委員長】

次回の策定委員会の日程だが、7月17日（木）に第4回策定委員会を開催したい。

【委員長】

以上で第3回昭島市地域福祉活動計画策定委員会を終了します。ありがとうございました。